

東京都における令和3年度のスモン患者検診

中嶋 秀人（日本大学医学部内科学系神経内科学分野）

小川 克彦（日本大学医学部内科学系神経内科学分野）

川上 途行（慶應大学医学部リハビリテーション医学教室）

菅谷 慶三（東京都立神経病院神経内科）

研究要旨

目的：東京都における令和3年度のスモン検診患者の現況を明らかにする。

方法：令和3年度のスモン検診の集計から得られたデータを分析し、スモン検診受診患者の現況について検索した。

結果：受診患者数は13人（男性；6人、女性；7人）であった。年齢は12人が65歳以上の高齢者であった。診察場所は、8人が対面で、5人が電話問診であった。発症年は「昭和40～44年」が9人と目立ち、重症時も、「昭和40～44年」が9人と多かった（無回答：2人）。発症年齢は9人が15歳以上であったが、「10～14歳」が2人、「0～4歳」が1人にみられた（無回答：1人）。発症時の視力障害は、障害の目立つ「眼前手動・指数弁」が合わせて4人であるのに対し、「ほとんど正常」～「軽度低下」が8人と多かった（無回答：1人）。歩行障害は全例にみられ、「不能」が9人と多く、「つかまり歩き」が2人で、「不安定独歩」と「一本杖」がそれぞれ1人であった。令和3年度では、視力合併症は12人と多くみられた。「視力の程度」では、9人が「ほとんど正常」～「新聞の細かい字が読める」であり軽症例が多かったが、4人は「新聞の大見出しが読める」状態であった。下肢筋力低下は9人にみられた（無回答：2人）。歩行障害は、不能例はないが全例にみられ、軽症の「独歩やや不安定」は3人であったが、「独歩かなり不安定」～「一本杖」が5人と多かった。外出では、不能例は1人で、「近く／遠くまで一人で可能」が9人と軽症例が多く、「車椅子」～「要介助」は3人であった。「体幹・下肢の表在感覚障害」は9人にみられ、分布では「臍部以下」と「そけい部以下」が合計7人と多かった（無回答：2人）。触覚異常と痛覚異常はともに9人にみられた（無回答：2人）。触覚では「中等度・高度低下」が合計6人にみられ、「過敏」も2人にみられた。痛覚では、「中等度・高度低下」と「過敏」がそれぞれ4人であった。下肢振動覚障害は10人にみられ、「高度障害」が6人と多かった（無回答：2人）。異常感覚は全例にみられ、「中等度」～「高度」が10人と多かった。「異常感覚の内容」では、「じんじん、びりびり感」が8人と多く、「しめつけ・つっぱり感」が6人、「痛み」が5人であった。下肢皮膚温低下は9人、尿失禁は5人にみられた。「初期からの経過」では、「軽減」が5人であったが、「悪化」も4人にみられた（無回答：3人）。「10年前からの経過」では、「悪化」は6人と多く、「不変」が3人であった（無回答：4人）。身体的合併症は12人にみられ、白内障（9人）が多く、高血圧症（6人）・骨折（5人）・四肢関節疾患（4人）もみられた。障害要因は「スモン＋合併症／加齢」が11人と多かった（無回答：1人）。療養状況では、在宅が11人と多かった。「診察時の重症度」では、「中等度」が7人と多く、「軽度」が3人

であった（無回答：2人）。治療は12人で受けており、「スモンの治療」は7人で、「合併症治療」は9人であった。「治療の内容」は8人が内服加療で、注射は2人と少数であった。「最近1年の転倒」は9人にみられ、「倒れそう」も2人であった。「一日の生活」では、「ほとんど毎日外出」～「時々は外出する」が9人で、屋内で主に生活する4人よりも多かった。

結論：発症時では、視力障害よりも歩行障害の方が目立っていた。令和3年度では、歩行障害の程度は発症時に比べ改善しており不能例はみられなかったが、中等度以上の異常感覚が多く、多くの例で残存していた。更に、最近10年間で約半数が症状の悪化を呈し、スモンによる後遺症に加え加齢に伴う併発症が障害要因になっている現状がみられた。

A. 研究目的

東京都における令和3年度のスモン検診患者の現況を明らかにする。

B. 研究方法

令和3年度のスモン検診の集計から得られたデータを分析し、令和3年度におけるスモン検診受診患者の現況について検索した。

C. 研究結果

1. 患者の内訳

受診患者数は13人（男性；6人、女性；7人）であった。年齢は12人が65歳以上の高齢者であった。診察場所は、8人が対面（施設・病院・保健所）で、5人が電話問診であった。

2. 発症時の所見

(1) 発症年・重症時期

発症年は「昭和40～44年」が9人と目立ち、重症時も、「昭和40～44年」が9人と多かった（無回答：2人）。発症年齢は9人が15歳以上であったが、「10～14歳」が2人、「0～4歳」が1人にみられた（無回答：1人）。

(2) 発症時の所見と医療状況

「発症時の視力障害」は、障害が目立つ「眼前手動・指数弁」が合わせて4人であるのに対し、「ほとんど正常」～「軽度低下」が8人と多かった（無回答：1人）。歩行障害は全例にみられ、「不能」が9人と多く、その他「つかまり歩き」が2人で、「不安定独歩」と

「一本杖」がそれぞれ1人であった。「発症後の医療」では、「当初入院後在宅療養」が7人と多く、「当初より在宅療養」の4人がついでいた。「入退院の繰り返し」と「在宅主体で時々入院」はそれぞれ1人であった。「機能訓練の程度」は「かなりやった」が5人で、「少しはやった」が6人、「ほとんどやっていない」が2人であった。

3. 令和3年度の所見

(1) 臨床所見

体格は、「高度のやせ」はなかったが、「軽度のやせ」が4人、「ふつう」が6人で、「肥満」が3人にみられた。食欲は、「ふつう」が8人と最多で、「やや低下」が4人、「亢進」が1人であった。

視力合併症は12人と多くみられた。「視力の程度」では9人が「ほとんど正常」～「新聞の細かい字が読める」であり軽症例が多かったが、4人は「新聞の大見出しが読める」状態であった。

「上肢の運動障害」は4人にみられた。握力低下は5人にみられた。下肢筋力低下は9人にみられた（無回答：2人）。「下肢の痙縮」は、「高度」はなかったが、「中等度」が4人で、「軽度」が5人にみられた。「痙縮なし」は2人であった（無回答：3人）。下肢筋萎縮は「中等度」が1人、「軽度」が4人であった（無回答：3人）。歩行障害は、不能例はないが全例にみられ、軽症の「独歩やや不安定」は3人であり、「独歩かなり不安定」～「一本杖」が5人と多かった。Romberg徴候は9人にみられた。外出では、不能例は1人で、「近く／遠くまで一人で可能」が9人と軽症例が多く、「車椅子」～「要介助」は3人であった。

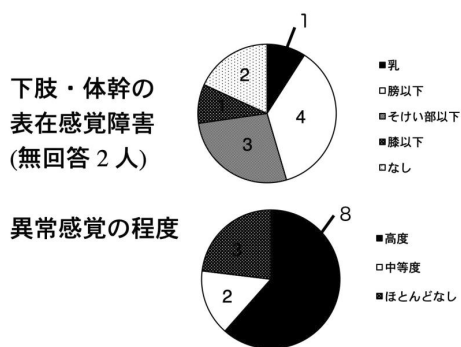


図 1

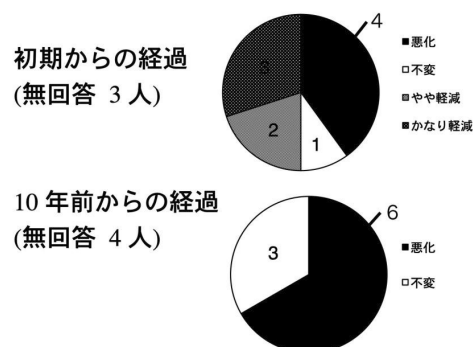


図 2

「体幹・下肢の表在感覚障害」は9人にみられ、分布では「臍部以下」と「そけい部以下」が合計7人と多かった（無回答：2人）。触覚異常と痛覚異常はともに9人にみられた（無回答：2人）。触覚では「中等度・高度低下」が合計6人にみられ、「過敏」も2人にみられた。痛覚では、「中等度・高度低下」と「過敏」がそれぞれ4人であった。下肢振動覚障害は10人にみられ、このうち「高度障害」が6人と多かった（無回答：2人）。異常感覚は全例にみられ、「中等度」～「高度」が10人と多かった（図1）。「異常感覚の内容」では、「じんじん、びりびり感」が8人と多く、「しめつけ・つっぱり感」が6人、「痛み」が5人であった。「感覚障害の末梢優位性」は9人にみられた。「上肢の感覚異常」は2人にみられた。

下肢皮膚温低下は9人、尿失禁は5人にみられた。このうち切迫性尿失禁は2人にみられた。「膝蓋腱反射の亢進」は6人にみられた（無回答：3人）。「アキレス腱反射の低下～消失」は8人にみられた。バビンスキー徴候は4人にみられた。クローヌスは4人にみられた。

胃腸症状は12人にみられた。このうち、「ときどき下痢」は3人にみられ、「ときどき便秘」も3人にみられた。「下痢・便秘の交代」も同じく3人にみられた。腹痛は2人にみられた。

(2) 経過

「初期からの経過」では、「軽減」が5人であったが、「悪化」も4人にみられた（無回答：3人）。「10年前からの経過」では、「悪化」は6人と多く、「不変」が3人であった（無回答：4人）（図2）。

(3) 障害要因・合併症・治療

障害要因は「スモン＋合併症／加齢」が11人と多かった（無回答：1人）。療養状況では、在宅が11人と多かった。「診察時の重症度」では、「中等度」が7人と多く、「軽度」が3人であった（無回答：2人）。

身体的合併症は12人にみられ、白内障（9人）が多く、高血圧症（6人）・骨折（5人）・四肢関節疾患（4人）もみられた。脊椎疾患は5人にみられた。脳血管障害は1人であった。心疾患は3人で、肝胆のう疾患は2人であった。「その他消化器疾患」は6人、糖尿病は1人、呼吸器疾患は3人、腎・泌尿器疾患は6人であった。パーキンソン症候を呈している例はなかった。「ジスキネジア・動作時また姿勢時の振戦」を呈している例もなかった。悪性腫瘍は1人にみられた。精神症候は11人にみられた。このうち、「不安・焦燥」は7人にみられ、「心気の状態」も4人にみられた。「記憶力低下」は7人にみられた。「認知症」は2人にみられていた。「受診している診療科」は、神経内科；7人、内科；3人、整形外科；4人であった。「入院中の患者」は1人であった（無回答：12人）。通院中は11であった（無回答：2人）。

治療は12人で受けており、スモンの治療は7人で、合併症治療は9人であった。治療内容では、注射が2人で、内服薬は8人であった。注射ではビタミンの注射が行われていたが、効果は乏しかった。外用薬は4人で使用され、漢方薬は2人で使用していた。リハビリは3人で行われていた。「針灸」は1人でのみ行われており、マッサージは2人で受けていた。

(4) 主に生活状態（介護・介助など）

「最近1年の転倒」は9人にみられ、「倒れそう」も2人であった。「一日の生活」では、「ほとんど毎日外出」～「時々外出する」が9人で、屋内で主に生活する4人よりも多かった。食事は12人が独立して行っていた。起き上がりで介助を要する例は3人であった。入浴は6人で介助を必要としていた。階段昇降でも、7人で介助を必要としていた。平地歩行でも介助を要する例は6人にみられ、このうち2人は全介助であった。トイレ動作で介助を要する例は1人のみであった。更衣で介助を要する例は3人であった。排便時の要介助例は5人で、排尿時の要介助例は6人であった。

「生活の満足度」では、「どちらかという満足・満足」は5人で、「どちらかという不満・不満」は5人であった。「なんともいえない」は3人であった。怪我をした例は6人で、骨折は1人にみられた。「身体障害者の手帳交付」は全例で受けており、4級；4人、3級；6人、2級；3人、であった。「移動でタクシー代の補助」は7人で受けていた。「介護保険での要介護度」は、要支援2；2人、要介護1；1人、要介護2；1人、要介護3；1人、であったが、無回答が7人と比較的多かった。「意見書の作成」を行った担当者は専門医が4人で、日頃の医師が1人であった。訪問介護は2人に利用されていた。訪問入浴介護は1人でのみ利用されていた。また、訪問看護は3人で利用され、訪問リハビリテーションは2人に行われていた。通所リハビリテーションも2人に利用されていた。福祉の用具を貸与されていたのは3人にみられた。福祉用具の販売を受けていた例は2人であった。在宅の改修を行なったのは3人であった。介護を受ける上で、不安を感じる例は11人であり、「介護者の高齢化」は3人にみられた。

D. 考察

発症時では、視力障害よりも歩行障害の方が目立っていた。

令和3年度では、歩行障害の程度は発症時に比べ改善しており不能例はみられなかったが、中等度以上の異常感覚が比較的多くの例で残存していた。治療では、漢方や針灸を受けている患者数が以前よりも減少し

ていた。更に、最近10年間で約半数が症状の悪化を呈し、スモンによる後遺症に加え加齢に伴う併発症が障害要因になっている現状がみられた。

E. 結論

1. 令和3年度の東京都におけるスモン検診受診患者の現況を検索した。
2. 現在においても、異常感覚が残存し、歩行障害を呈する例が比較的多くみられた。
3. スモンによる後遺症と加齢による併発症が障害要因になっている現状がみられた。

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし